障害のある子ない子 一緒に学童

写真は昨年9月15日～16日に愛知県刈谷市で開催された「第13回障害児の高校進学を実現する全国交流集会 in あいち」で司会を担当した私。「いっしょに行こまい！高校も！」というテーマの集いであり、多くのことを学んだ。2日間にわたり、全体会の司会をつとめ、なんだか視界が広がった。

そんなこともあり、写真下の朝日新聞9月14日朝刊「はぐくむ」に注目した。途中まで紹介したい。リードから―放課後の居場所である学童保育（放課後児童クラブ）。障害のある子もない子も共に生きる「インクルーシブ」を掲げ、受け入れ児童の約半数が障害のある子という学童があります。

はぐくむ

障害ある子ない子 一緒に学童

母ら立ち上げ 横須賀の施設

生活の場で触れ合い 共に成長

鮮魚店や青果店が立ち並ぶ駅前の商店街にある学童に、小学校帰りの子どもたちが続々とやってきた。昨年オープンした神奈川県横須賀市の学童保育「sukasuka―kids」。小学校1年生から6年生まで約30人が通い、常に3、4人の支援員ら職員が見守る。学童を運営する一般社団法人の代表・五本木愛さん(45)は、娘の麗さん(8歳)がアンジェルマン症候群という難病。知的障害やてんかんなどがある。麗さんを育てる中で障害児の子育て情報が少ないと感じ、情報サイト「sukasuka―ippo」を、同じように障害児を育てる母親たちと始めた。名前には「横須賀で一歩一歩進もう」との思いを込める。取材の過程で足りない支援に気づき、市に要望しても制度が変わるには時間がかかると知って、自ら動いて学童を立ち上げた。麗さんも通う。

「何があったの？」。職員が麗さんの近くにいた子どもに尋ねた。発語が難しい麗さんは、自分の気持ちを伝えられず、他の子どもをたたいてしまうこともある。そんなとき、職員は周りの子どもたちに麗さんがなぜたたいてしまったかを考えるように促す。子どもは「遊んでいたボールがぶつかってしまった」と言い、「ごめんね」とあやまった。麗さんも「ごめんね」のポーズで応じた。障害のない子にとっても成長の場だ。藤田玲奈さん(9)は、周囲とうちとけることが苦手で、以前通っていた別の学童ではうまくいかなかった。母の有加さん(29)は「ここに通い始めてから、自分の気持ちを言えるようになって、年下の子の面倒まで見られるようになりました」。

五本木さんは、「障害のある子は『みんなと同じ』経験が成長につながり、障害のない子は他人の思いを想像する経験ができる。双方の育ち合いになる」と話す。「自分と違う意人を受け入れることが自然になれば、差別や偏見もなくなっていくのではないでしょうか」

（2019年9月19日）